

例会記事

七月例会 七月二十三日(土)

順天堂大学医学部九号館一番教室

- 一、アンブローズ・パレの針が曲った 大村 敏 郎
一、小石元俊の「経験方録」について 津 田 進 三

例会講演要旨

アンブローズ・パレの針が曲った

大村 敏 郎

アンブローズ・パレ (Ambrose Paré, 1510頃～1590) の外科は十六、七世紀のヨーロッパに広まって、鎖国中のわが国にもオランダ商館医の手によって、パレ全集のオランダ語版がもたらされた。

これはわが国に最初にとどいた系統的な西洋外科書であると共に、一部が訳されて西洋外科の翻訳書(現代でいう翻訳とは少し意味が異なる)の第一号として、一七〇六年の紅夷外科宗伝(植林鎮山著)が生れてくる。

それには色々の曲折を経ており、文字通り曲って伝わった部分があるので、そのいくつかを指摘しながらパレを見なおしてみたい。

(一) 全集の中でパレ自身がトリノ旅行を一五三六年と書いているのだが、実は一年あとのことで、記憶がおぼろげなほど後に

なって旅行記を書いているのである。したがって、その旅行記の中に初めて登場する「私が処置をし、神がこれを癒し給うた」(「Je le pensay, et Dieu le guarit.」)という名言は治療の現場で、患者の感謝の言葉に答えて言ったものではないことを指摘しておきたい。

(二) ジョゼフ・フランソア・マルゲーニユ (Joseph Francois Maigne, 1806～1865) が一八四〇～四一年に完全本と称するパレ全集の復刻を行った。同じ頃パレの生地にブロンズ像も建つ、いわばパレのルネッサンスと言うことが出来る。マルゲーニユはパレに至る外科の歴史を述べ、右に述べた名言を外科医の謙虚な姿勢として高く評価したのである。ただしその名言の綴りを一カ所誤って伝えてしまったのが残念である。

(三) パレの性格は名言によって大変謙虚な点のみが伝わっているが、実はもっと強い個性の持主で、医学と宗教の面ではゆずらなかつたし、その他の点では柔軟な姿勢をみせて、巧みな世渡りをしていることを、数多く出版した文献の扉絵の中に、国王のイニシアルがちりばめられていることから考えられる。

(四) パレの有名な肩関節脱臼整復図のうち、特殊なバーを使用する方式があるが、日本ではバーの詳細な図が全く欠損したまま伝わっている。蘭書から最初に書きうつした絵師の書きおとしにちがいない。現実には使わなかつたかもしれないが、パレを象徴する位の図だから正しく伝達してほしかった。

(五) 最後にカスガイ膏と呼ばれている顔面外傷の形成術の絵を集めて検討した所、原著のフランス版では一本の直針でぬって